

課題 2 妊娠に影響する感染性疾患の知識と予防行動における初産婦と経産婦の比較～妊娠初期の感染性疾患スクリーニングが母子に及ぼす影響に関する前向き観察研究より～

横浜市立大学附属病院 産婦人科 岩田亜貴子

2018年12月22日(土) 13:00-16:00 フクラシア丸の内オアゾ/Hall B

【目的】(図1)

B型肝炎, C型肝炎, 風疹, 梅毒, ヒトT細胞白血病(HTLV-1)は妊娠に影響する感染性疾患であるが, これらの知識と予防行動において初産婦と経産婦に違いがあるかはわかっていない. 妊婦へのアンケート調査からこれらを明らかにする.

【方法】(図2)

大学附属病院2施設において, 2018年5月から8月までに, ウェブサイト上のアンケートに回答した241人の妊婦を対象とした. 児の健康に影響すると考えていた病気として回答した上記5疾患への回答率と, 2012年～2013年ごろに風疹が流行したことを知っていたかを問う質問, 日本の若い男女に梅毒の感染が増えていることを知っていたかを問う質問, B型肝炎ウイルスが性交渉でも感染することを知っていたかを問う質問への正答率, 妊婦と妊婦のパートナーの風疹ワクチン接種経験, 妊婦の風疹抗体保有状況を集計した. 風疹抗体価はHI法で32倍以上を抗体ありとした. それぞれの項目を初産群と経産群とで分け χ^2 検定を用いて比較した. アンケートの質問内容を図4, 5に示す.

【結果】

初産群125人, 経産群116人であった. 平均年齢は全体33.2歳, 初産群32.8歳, 経産群33.7歳であった. (図6) 初産群と経産群との比較では, 児の健康に影響する病気と回答したのは, B型肝炎31.2% vs 34.5%, C型肝炎24.8% vs 31.0%, 風疹64.0% vs 63.8%, 梅毒34.4% vs 34.5%, HTLV-1 24.0% vs 26.7%であり, いずれも有意差を認めなかった. (図7) 2012年から2013年ごろの風疹流行を知っていたのは56.5% vs 67.8%, 梅毒感染増加を知っていたのは43.5% vs 47.0%, B型肝炎ウイルスが性交渉でも感染すると知っていたのは35.5% vs 26.1%であった. (図8) 妊婦の風疹ワクチン接種率は68.5% vs 66.1%, パートナーの接種率は50.0% vs 41.7% (図9), 妊婦の風疹抗体保有率は66.4% vs 73.3%であり (図10), いずれも有意差を認めなかった.

【考察】

妊娠に影響する感染性疾患の知識と風疹ワクチン接種率, 抗体保有率において初産婦と経産婦に差を認めなかった. これは妊娠出産を経てこれらの疾患の知識を得て, 風疹ワクチン接種等の予防行動をとるだろうという予想を覆す結果であった. (図11)

疾患別にみると、風疹は他疾患に比べ全体の認知度が高い傾向にあった。(図 12)

これには最近の風疹流行に関する報道も影響していると推測される。日本で 2012 年から 2013 年に風疹が流行し、特に女性への風疹ワクチン接種を啓蒙する対策が行われ、一旦は収束したかのように思われていた。しかし 2018 年より再度風疹感染者が増加し、現在も感染者数は増加の一途をたどっている(図 13)。そして遂に今年 1 月に先天性風疹症候群の発生が報告された。風疹への理解度は他疾患と比べ高いとはいえ 6 割程度であることや、経産婦と初産婦のワクチン接種割合が変わらないことから、風疹の危険性とワクチンの重要性への理解が不足している実態が本研究結果からもうかがえる。

(図 14)

【結語】

妊娠に影響する感染性疾患の知識と風疹ワクチン接種率、抗体保有率において初産婦と経産婦に差を認められた。妊婦への感染性疾患と予防方法の啓発が必要であることが明らかになった。(図 15)

(本研究内容の要旨は第 71 回日本産科婦人科学会学術講演会にて発表予定)

妊娠に影響する感染性疾患の知識と
予防行動における初産婦と経産婦の比較
～Pregnant Women Health Initiative project～

横浜市立大学附属2病院妊婦アンケート調査の
暫定解析結果より

横浜市立大学附属病院 産婦人科
岩田亜貴子



図 1

目的

- ・ B型肝炎, C型肝炎, 風疹, 梅毒, ヒトT細胞白血病(HTLV-1)は母子の健康への影響が大きい感染性疾患であり, 妊娠初期にスクリーニングが行われる.
- ・ しかし, これらの感染性疾患に対する知識, 予防行動において, 初産婦と経産婦に違いがあるかはわかっていない.
- ・ 横浜市立大学附属2病院における妊婦へのアンケート調査からこれらを明らかにする.

図 2

方法

- ・横浜市立大学附属病院と横浜市立大学附属市民総合医療センターの2施設において、2018年5月から8月までに、ウェブサイト上のアンケートに回答した241人の妊婦を対象とした。
- ・PWHI調査のアンケート項目の中からB型肝炎、C型肝炎、風疹、梅毒、ヒトT細胞白血病(HTLV-1)についての質問項目に対する回答を集計した。
- ・対象者の初期検査における妊婦の風疹抗体保有率を集計した。抗体価はHI法で32倍以上を抗体あり、16倍以下を抗体なしとした。
- ・それぞれの項目を初産群と経産群とに分け、 χ^2 検定を用いて比較した。

図 3

アンケート質問内容【知識を問う質問】

- Q1. あなたが妊娠前に、お子さんの健康に直接影響すると考えていた病気はどれですか？（あてはまるものすべてにチェック）
- ①B型肝炎 ② C型肝炎 ③風疹 ④梅毒 ⑤ヒトT細胞白血病ウイルス
- Q2. 日本で若い男女に梅毒の感染が増えていることを知っていましたか？
- Q3. B型肝炎ウイルスは性交渉でも感染することを知っていましたか？
- Q4. 日本で2012年(平成24年)～2013年(平成25年)ごろに風疹が流行したことを知っていましたか？

図 4

アンケート質問内容【予防行動を問う質問】

- Q5. あなたはB型肝炎ワクチンを接種したことがありますか？
- Q6. あなたは風疹ワクチンを接種したことがありますか？（MRワクチン、MMRワクチンも風疹ワクチンです）
- Q7. お腹のお子さんのお父さんは、風疹ワクチンを接種したことがありますか？

図 5

結果

- ・初産群125人，経産群116人であった。
- ・平均年齢は，全体33.2歳，初産群32.8歳，経産群33.7歳であった。

図 6

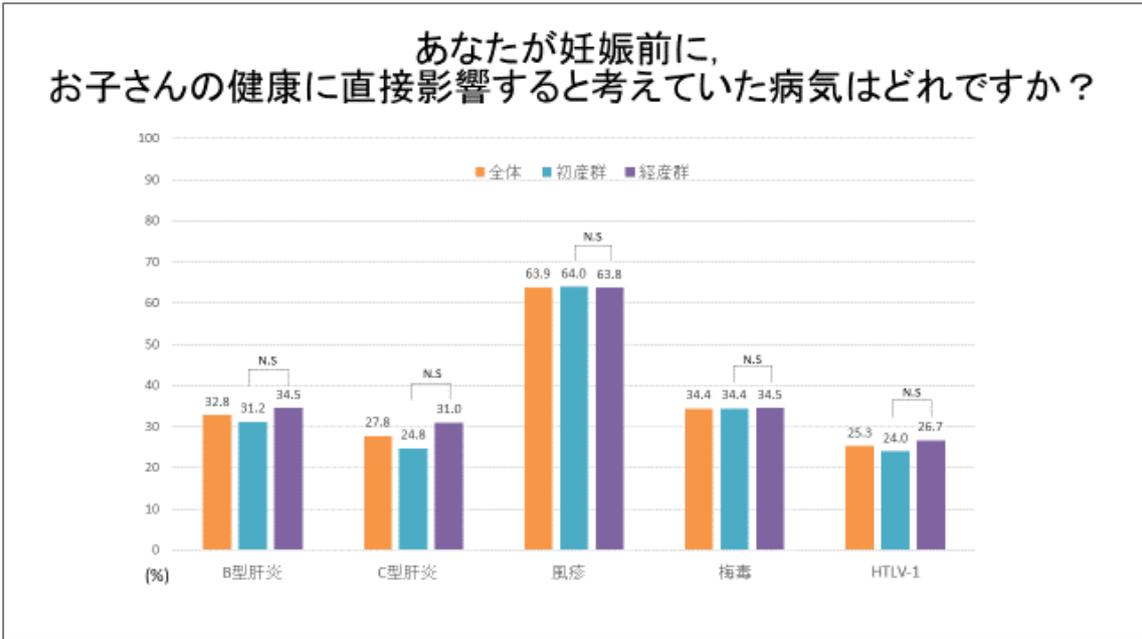


図 7

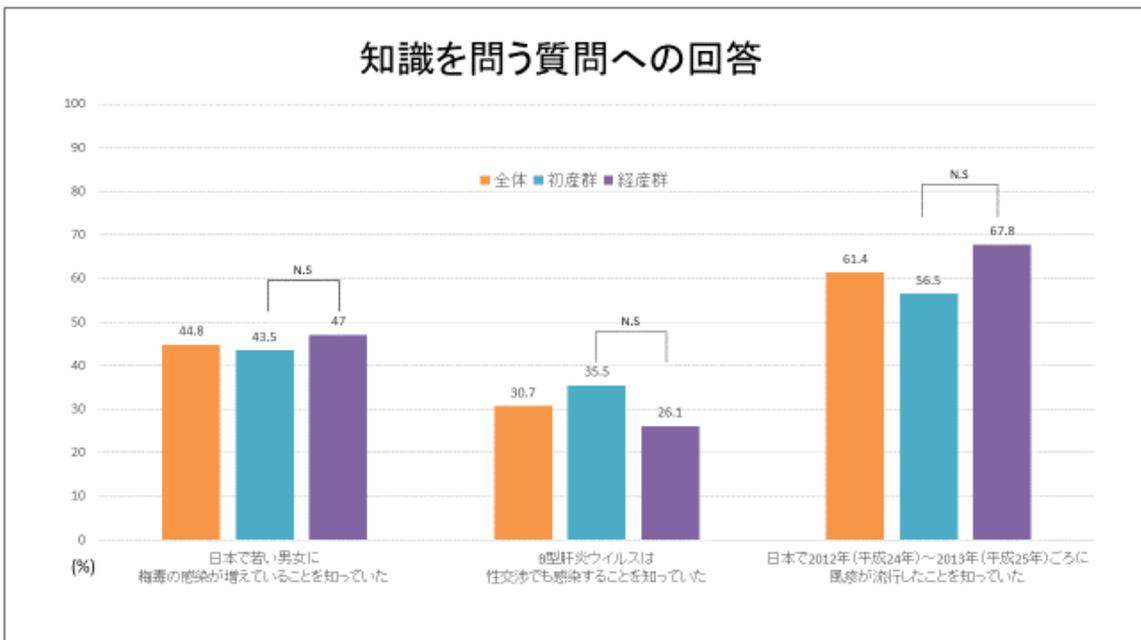


図 8

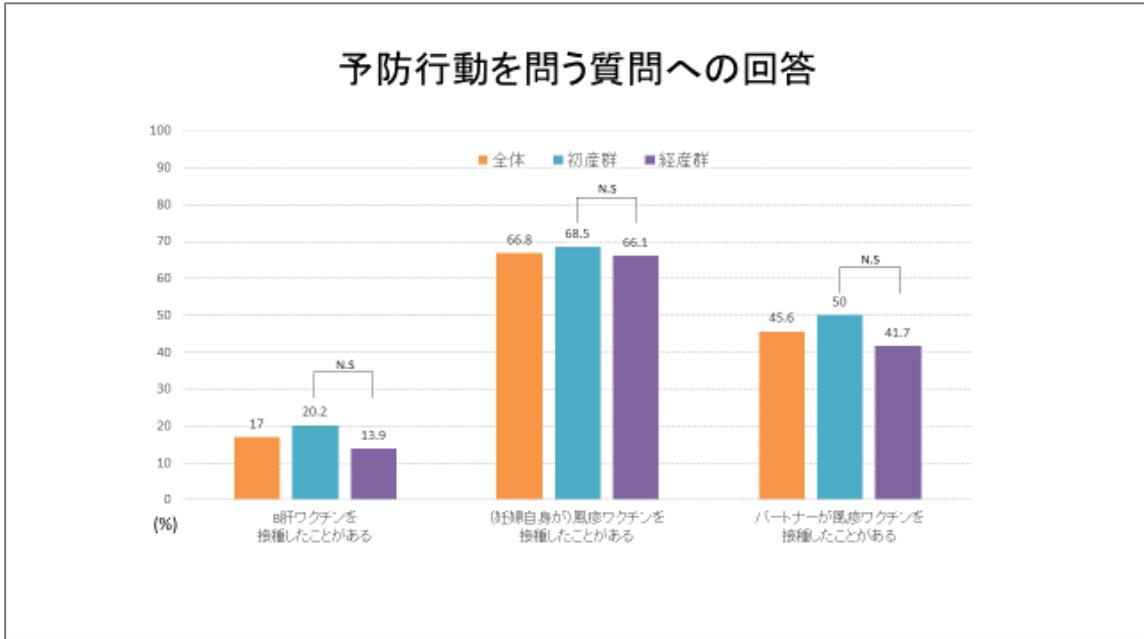


図 9

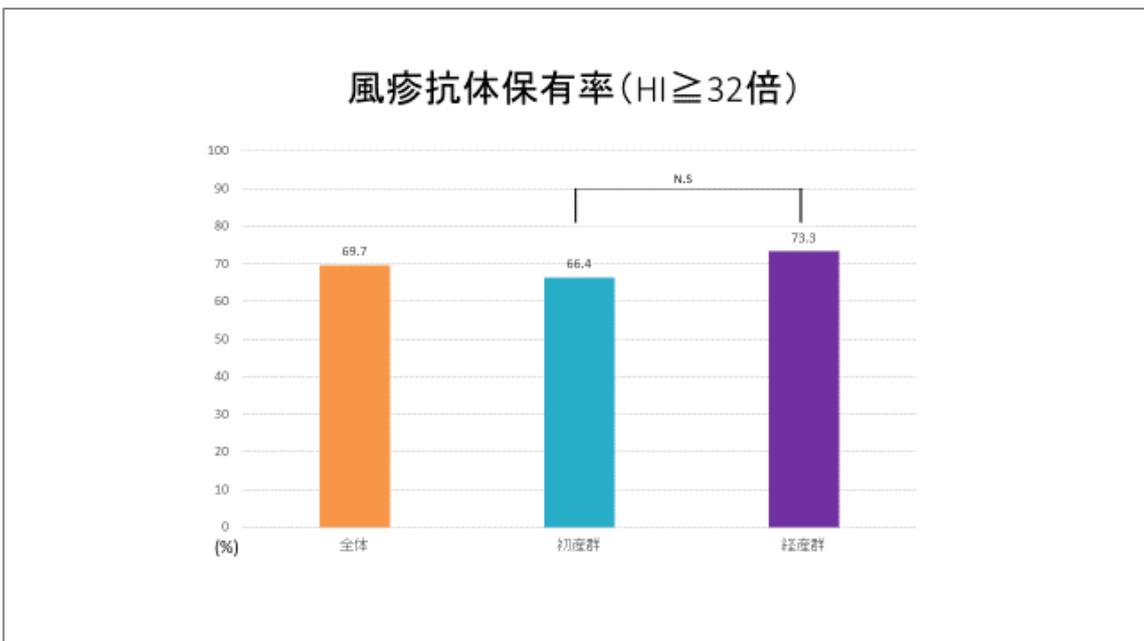


図 10

考察：経産婦の初産婦の比較について

- ・アンケート結果から、妊娠に影響する感染性疾患の知識と風疹・B型肝炎ワクチン接種率、風疹抗体保有率において初産婦と経産婦に差を認めなかった。
- ・これは妊娠出産を経てこれらの疾患の知識を得て、ワクチン接種等の予防行動をとるだろうという予想を覆す結果であった。
- ・この要因として、これらの疾患が初期検査で確認されている項目であるという認識がされていない可能性がある。
- ・認識を高めるためには、医療者側が検査結果を伝える時に、「問題なし」の一言ではなく、各疾患の説明を加えながら伝える必要がある。

図 11

考察：風疹に関して

- ・疾患別にみると、風疹は他疾患に比べ全体の認知度が高い傾向にあった。
- ・これには最近の風疹流行に関する報道も影響していると推測される。

図 12

風疹患者数の推移

国立感染症研究所 感染症疫学センターによる風疹流行に関する緊急情報(2018年12月5日現在)より

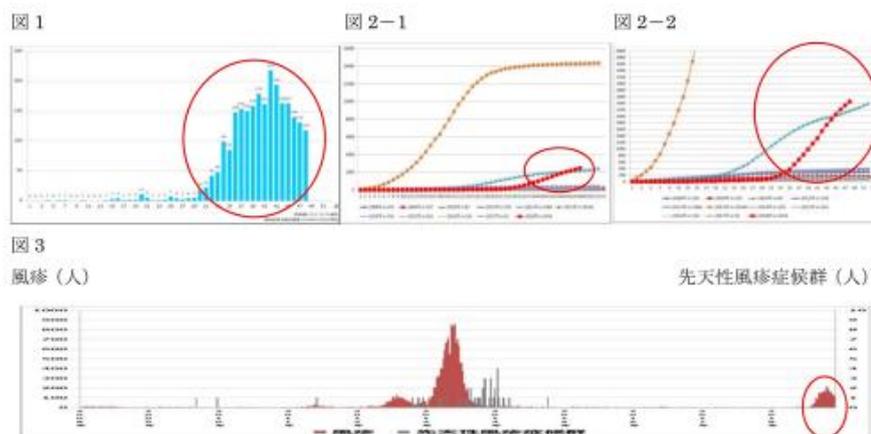


図 13

考察: 風疹に関して

- 疾患別にみると、風疹は他疾患に比べ全体の認知度が高い傾向にあった。
- これには最近の風疹流行に関する報道も影響していると推測される。
- しかし、経産婦は初産婦に比べ風疹抗体保有率やワクチン接種率に差が認められない結果となり、抗体価の低いことを認識した妊婦が、分娩後に予防行動の手段があるにも関わらず行動に移していない事実が浮かび上がってきた。
- 医療者や行政からの風疹予防に関する啓発も不足していると思われる。

図 14

Limitaion

- ・今回の検討は、大学附属病院2施設に限られた比較的短期間のアンケート回答結果からの検討であり、今後アンケート回答数・施設が増えたところでの再検討をおこなう必要がある。
- ・風疹に関しては、経産婦における初回妊娠時との風疹抗体価の比較はできていない。風疹についての予防行動は、初産時に抗体価の低かった妊婦を抽出できれば、より正確な検討・議論がおこなえる可能性がある。

図 15

結語

- ・妊娠に影響する感染性疾患の知識と風疹・B型肝炎ワクチン接種率、抗体保有率において初産婦と経産婦に差を認めなかった。
- ・妊婦とその家族への感染性疾患と予防方法の啓発が早急に必要であることが明らかになった。
- ・特に風疹に関しては、抗体価の低い妊婦が分娩後確実にワクチン接種を受けられるようなシステム構築をすべく、今後もアンケート結果の解析を続けていく。



図 16